



# 天沼熊野神社社報

<http://www.amanumakumano.org/>

平成20年7月1日

発行所

天沼熊野神社

宮司 渡辺 寛

杉並区天沼2-40-2

TEL 3220-7866

## 天沼今昔物語 (第五話)

―杉並区の杉並の由来について―

杉並の名称の起源は、古いものではなくわりと新しいものです。徳川時代初期に、旗本の岡部氏(千五百石)が、成宗村、田端村の領主になったとき、

阿佐谷村(赤坂日枝神社の社領地、天沼村も同様です)との領地境の目印として、青梅街道ぞいに植えた杉の並木からきています。阿佐谷の地名の方が古いのですが、青梅街道を通る人が増えるにつれ、また、暑い夏の日には涼んで休憩したり、雨宿りしたりして「青梅街道の杉並木」の名称から杉並の地名(字名)が生れたのではないのでしょうか。今の区役所のあたりです。

江戸時代初めの阿佐谷村の字名を見ると、向、小山、原、本村しかなく、杉並はありません。又、近隣にもありません。ですから、間違いない、江戸時代の初期に岡部氏が植えた杉の並木が杉並の縁起と考えます。

ですが、この近隣では一番古い地名の阿佐谷ではなく、どうしてこの新しい地名が、今、この近隣を代表する名称に格上げされたかと言うと、明治二十一年の町村制施行で近隣の村々が合併されることとなり、天沼村、高円寺村、馬橋村、阿佐谷村、田端村、成宗村、下荻窪村の7村が合併し、その村名は阿佐谷村と提案されたの



ですが、下荻窪村は上荻窪村の方に合併したほうがよいとされ、次に村名は、字杉並の地名が今は著名なので名称を杉並村としたいと再提案され了承されたのです。初代の村長は玉野惣七さんで、村役場は世尊院に設置されました。

大日本帝国憲法の発布(明治22年)に合わせて、地方制度の再編も実施され、翌年には、第一回衆議院総選挙も行われています。藩閥政治から立憲体制へ転換する最中、明治22年(1889年)杉並村は誕生しました。これにより、現在、杉並木はありませんが、杉並の名前が継承され今の杉並区の名称に至っています。

参考：杉並区で一番古い地名は、阿佐谷なのです。応永二十七年(1420年)の記録に残っています。紀伊半島の熊野那智大社がお札を配っていた記録に「米良文書」というのがあります。そこに「江戸氏の十八流」として、お札を配る為に家の名が記載されていて、阿佐谷殿(杉並区阿佐谷)、丸子殿(大田区、川崎市)、中野殿(中野区)、飯倉殿(港区麻布)、牛島殿(墨田区向島等)等々十八軒の記録が残っています。これ等の地名は600年前からある地名で関東では古いものとなります。ちなみに、熊

野様のお札を全国に配って周っていた人たちのことを、御師(おし・御祈師の略)といい、天照大御神様のお札を配って周っていた人たちのことを、御師(おんし・御祈師の略)といいます。

私見の部分も多々ありますので、ご指導、ご指摘頂ければ幸いです。

# 小さな人生論

致知出版社

今回は今までとは違いまして、私が最近読んで感動した本「小さな人生論1・2」から、皆様にも是非知っていただきたいお話をご紹介します。

## 感動・笑・夢

児童文学作家の故・椋鳩十さんが、こういう話をしてもらえる。

椋さんの故郷は信州の伊那谷の小さな村。三十年ぶりに帰省すると、小学校の同窓会が開かれた。禿げ上がったり皺がよったり、初めは誰が誰やら分からなかったが、次第に幼い頃の面影が蘇ってきた。

だが、一人だけ、どうしても思い出せない。背が低く色が黒く、威風がある。

隣席の人に聞くと、「あんな有名だったやつをわすれたのか。ほら、しらくもだよ。」

椋さんは、えっ?となった。しらくもは頭に白い粉の斑点がでる皮膚病である。それを頭にふき出して嫌われ、

勉強はビリでバカにされ、いつも校庭の隅のアオギリの木にポツンともたれていた。

ゆつたりとした風格を滲ませてみんなと談笑している男が、あのしらくもとは……聞けば、伊那谷一、二の農業指導者としてみんなから信頼されているという。

二次会で椋さんは素直に、「あのしらくもがこんな人物になるとは思わなかった。何かあったのか」と聞いた。彼は「誰もがそう言う」と明るく笑い、「あった」と答えた。

惨めで辛かった少年時代。彼はわが子にはこんな思いはさせまい、望むなら田畑を売っても上の学校にやろうと考えた。だが、子どもの成績はバツとせず、勉強するふうもない。ところが、高校二年の夏休みに分厚い本を三冊借り

てきた。その気になってくれたのかと彼は喜んだ。が、一向に読むふうがなく、表紙には埃が積もった。

彼は考えた。子どもに本を読めというなら、まず自分が読まなければ、と。農作業に追われ、本など開いたこともない。最初は投げ出したくなかった。それでも読み続けた。引き込まれた。感動がこみ上げた。その感動に突き動かされ、三回も読んだ。その本はロマン・ローランの『ジャン・クリストフ』。聴覚を失ってなお自分の音楽を求め苦悩したベートルヴェンがモデルといわれる名作である。主人公ジャンの苦悩と運命が、彼にはわがごとくのように思われたのだ。

だが、ジャンは自分とは違っていた。ジャンはどんな苦しみに落ち込もうが、必ず這い上がってくる。絶望の底に沈んでも、また這い上がってくる。火のように生きている。自分もこのように生きたいと思った。そのためには何か燃

える元を持たなければ。自分は農民だ。農業に燃えなくてどうしよう。

彼は農業の専門書を読みあさり、農業専門員を訪ねて質問を浴びせ、猛烈に勉強を始めた。斬新な農業のやり方を試みて成功させ、そして、しらくもはみんなから頼りにされる農業指導者と化した。

この話をされた椋鳩十さんは、終わりに力強くこう言っている。

「感動というやつは、人間を変えちまう。そして奥底に沈んでおる力をぎゅうと持ち上げてきてくれる」

人間の目は前に向かってついている。前向きに生きるのが人間であることを表象しているかのようなのである。

感動は人を変える。笑いは人を潤す。夢は人を豊にする。そして、感動し、笑い、夢を抱くことができるのは、人間だけである。天から授かったこのかけがえのない資質を育

み、さらに磨いていくところに、前向きな人間は拓けるのではないだろうか。

## 「我流」を行く

無名の彫刻家ロダンは孤独の中で黙々と修行を積み、密かな成熟を遂げた。そして一八六四年、二十四歳の時、一つの作品を発表する。「鼻のつぶれた男」である。だが、ロダンの成熟は当時のサロンには理解されなかった。作品は落選した。ロダンはふたたび沈黙する。この沈黙はそれからロダンが若者の像『青銅時代』を発表して世間の注目を集めるまで、実に十三年も続くのである。

二十歳を過ぎたばかりで神経衰弱を病む、これもまた無名だったドイツの詩人リルケが、パリ郊外にロダンを訪ねたのは、ロダンがその地位を確立していた一九〇二年だった。リルケは約二年間を秘書としてロダンのもとで暮らす。

リルケは驚愕した。ロダンの生活ぶりに、である。世間の評判などどこ吹く風、ひたすら大理石を刻み、思索にふけり、また鑿を振るう。黙々とその研鑽を繰り返す。

その姿に感動して、リルケは言った。

「ここに生き神様がおられる。これだけ我慢でき、これだけ自分の仕事に情熱を注ぎ得る人は神様だ」

ロダンの生活と人格に若い詩人の魂が感応し、リルケもまた詩人として大成していくのである。

後年、リルケはこういう言葉を残している。

「私の課題は私自身を成熟させることだ」

若年期のロダンとの生活の中からこの言葉が生れたことは想像に難くない。

「我流」とは、単なるわがままのことではない。単なる気まま、自分勝手のことではない。リルケの言う『自分自身を成熟させる』ことである。大いなる理想に向けて自分自身を成熟させていく、そのプロセスの果てに自然に生まれてくる、あるいは形成される、その人なりの流儀―それこそが「我流」なのである。

身を成熟させていく、そのプロセスの果てに自然に生まれてくる、あるいは形成される、その人なりの流儀―それこそが「我流」なのである。

「守破難」という言葉がある。世阿弥の『花伝書』に書かれ、また武道などでも言われる、修行の姿を示す言葉である。厳しく鍛えて基礎を完璧に自分のものにするのが「守」である。その向こうに創造性が芽生える。「破」である。そして自分のリズムで自在に動く境地が出てくる。それが「難」である。これはそのまま「我流」の姿でもある、と言えるだろう。「難」に至るのは至難の業である。だが、「守」がなければ「破」にも「難」にも至り得ないことを我々は知るべきである。

読者の方からお便りをいただいた。愛知県の有間重喜さんである。お便りにはこう書かれていた。

「私は九十三歳の老農です。死を直前にして少しでも磨きをかけて旅立ちたいと勉強し

ています。因みに、私は致知創刊十周年記念大会に参加以来の読者です」「我流」を行く人がここにもいる。

宮司所見：神道には、自然崇拜と祖先崇拜の大きな二つの柱があります。私は、これに生成発展（松下幸之助）を加えたいと思います。人生は一度しかないのです、常に前を向いて事に当り進んでいく。常に、一生懸命に、全力を発揮して、そうすれば道はひらけてくる、と。





## 天沼熊野神社の四季



〔八月〕夏祭り 子ども神輿の出発です。



〔正月〕みなさまの罪、穢れをお祓いしています。



〔八月〕夏祭り 稲妻会のお神輿です。



〔四月〕初めて、千鳥ヶ淵、靖国神社でのお花見をしました。



〔七五三〕お子様の健やかな成長を御祈念いたします。



〔四月〕右近桜も年々立派になってきました。



〔冬〕子地藏さんに、マフラーと帽子を頂きました。



〔五月〕こいのぼりが、お子様の成長を念じて、泳いでいます。